

キャンプを企画する人のための

リスクマネジメントのてびき

安全なキャンプのために Part10



社団法人 日本キャンプ協会

安全キャンプのすすめ



キャンプは、ふだんの生活環境からはなれ、新しい経験や活動にチャレンジすることが多く、またふだん使い慣れない用具や施設を使う機会が多いため、事故やケガが起きやすい環境にあるといえます。

しかし、そのことにばかりに気を取られ、「あれもこれもダメ、あれもこれもやめておこう」といった消極的なキャンプになってしまうと、参加者にとって「わくわく感」のない「楽しくない」キャンプになってしまうばかりか、キャンプ企画者の当初の「ねらい」も十分に達成できない結果になりかねません。

ケガや病気を含めた事故を未然に防ぎながら、楽しく安全なキャンプを積極的に行うためには、「周到な計画・準備」「指導者のトレーニング」「事故防止のための対策」「救急対策」および「補償対策（保険）」を充実させることが大切となります。

キャンプでは、事故やケガが起きる確率をゼロにすることは困難です。従って、指導にあたる人は、この確率をできるだけ低く抑えるために計画段階、実施段階、事後を通して想定しうるリスクを予測し、そのための対策を徹底的に講じることが大切です。また、企画、運営にあたるスタッフ全員で、「安全」について話し合いを持つことがキャンプの安全を考える上で重要な対策のひとつとなります。

本冊子は、キャンプの安全に関する基礎的なことがらを項目別に整理しています。安全なキャンプを行うための参考にいただければ幸いです。

社団法人日本キャンプ協会 安全管理委員会

目	次
安全キャンプのすすめ	1
1. キャンプにおける「危険」のとらえ方	2
2. 計画段階から実施までの安全チェック	4
安全面から見た施設、用具、プログラムの選び方	6
3. 参加者情報の必要性和その扱い方	9
4. 指導者がになう安全管理のポイント	13
ふだんから安全について学ぶ	14
安全講習を開催している主な団体・組織	15
5. 事故が起きてしまったら	16
応急処置（応急手当と救命手当）	18
6. 保険は重要なリスクマネジメント	20
資料：チェックリストで事故を未然に防ごう	23
資料：事前にチェック、お役立ち情報！！	26

1. キャンプにおける「危険」のとりえ方

キャンプは家族で楽しむものから教育的効果を意図するものまで、野外での活動として幅広く多くの人々に親しまれています。

しかし、日常とは違う環境で、使い慣れない器具や道具を扱う機会が多いので、安全には十分な配慮をしなければなりません。また、自然の中には、刻々と変化していく気象やさまざまな動植物の営みなど、人の力の遠く及ばないことが無数にあることを認識し、それらを謙虚に受け止めることが必要です。

このような環境の中で、できる限り想像力をはたらかせ、起こりうる危険を予測し、その要素を一つひとつ点検し、ていねいに安全対策に取り組むことが、野外活動における安全管理の基本的な考え方です。

リスクとハザード

危険について整理しておくことは、禁止項目を必要以上に増やさず、のびのびと達成感が得られる活動につながる重要なポイントになります。ここでは、危険を「リスク」と「ハザード」に分けて考えてみましょう。

リスク (RISK) : やってみたいと思って挑戦する時に起こる危険のこと

木登り⇒落ちる 火を焚く⇒やけどをする 刃物を使う⇒切り傷を負う など

このような挑戦を重ねていく中では、小さなケガをすることもあってもいいかもしれません。しかし、何が危なくて、どう気をつけたらいいのかは経験から学ぶことができ、やがては自分自身で身を守る力を持てるようになるでしょう。

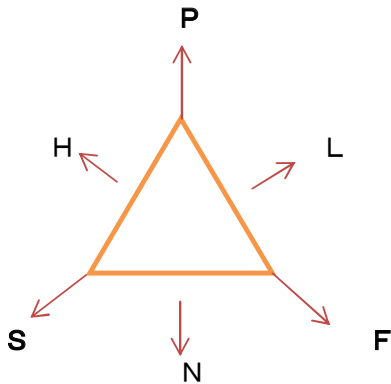
ハザード (HAZARD) : 目に見えない危険のこと

道具の故障や劣化 自然環境や生き物 子どもの動線 人間関係 など

命の危険、大きな事故につながるものは確実に取り除かねばなりません。事前に予測し、対策を立て、かかわる大人がその情報を共有していることが重要です。しかし、自然の中では、地形や生き物たちに「気をつける」ことでしか防ぐことができないものもあります。

参加者（子ども）の「挑戦してみたい」ことをどこまで許容できるかは、見守る指導者（大人）の経験の幅によるところが大きいと思います。大人自身のヒヤドキ体験を思い起こすことも、危険を予想する手がかりになるでしょう。

安全管理(リスクマネジメント)の考え方

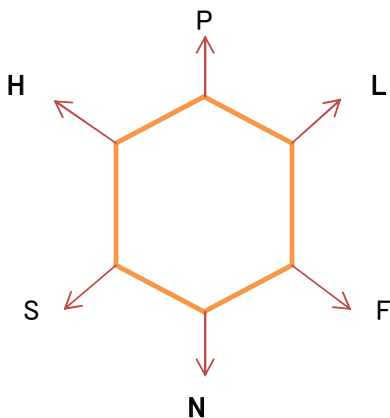


P (participant)・・・参加者の安全対策
適正な人数、安全教育、危険の種類とその認知

S (staff)・・・スタッフの安全対策・スキルアップ
体制作り、マニュアル、チェックリスト作り
危険の予知、認識判断、CPR、救急法

F (field)・・・フィールド・施設の安全対策
フィールド、施設、用具、資材に関する知識

「危険だからやらない、させない」ではなく、P(参加者) S(スタッフ) F(フィールド)の3点について、丁寧な対策を立てることで安心が増え、安全につながるものと思います。

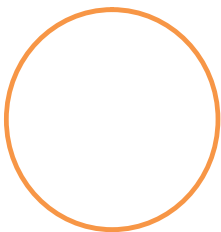
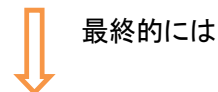


H (human)・・・人体の生理や心理が持つ危険の対応策
医学的、心理学的人体の知識

L (law)・・・保険や法律に関する対応策

N (nature)・・・自然界のさまざまな危険への対応策
天候、危険生物の知識

H(人体の生理や心理) L(保険や法律) N(自然界での危険や天候等)に関する知識・技術を身につけることで参加者のチャレンジの範囲がより広がるでしょう。



このP・S・F・H・L・Nの矢印を全体的に引き上げ、円に近づくように面積を広げることで、参加者も、スタッフもより安全に活動できる範囲が広がります。

- ▲ これからやるべきことは何か
- ▲ 備えることは何か
- ▲ 何ができていて、何ができていないか明確にする
(比較、分析、検討、対策)

(2001年 野外教育企画担当者セミナー「リスクマネジメントセミナー」講義より 星野敏男)

2. 計画段階から実施までの安全チェック

キャンプは参加する対象者や目的に合わせてプログラムが作成され、運営体制や指導方法などもそれに沿って決定されるのが基本です。

しかし、キャンパー・ファースト（キャンパーの立場を最優先すること）の考え方からはずれ、キャンプ企画者（指導者）自身がキャンプをするような錯覚に陥って計画を立ててしまうと、キャンプの目的を達成できないだけでなく、事故やケガを引き起こしてしまう可能性があります。

○日程、プログラム作成

①参加者の特性を把握する

対象者の人数、年齢、経験の度合い、体力などによって一つひとつの活動に要する時間や疲労度が異なります。これらを考慮して日程・プログラムを作成しなければ、無理がたたって事故やケガの発生につながる可能性があります。

②ゆとりのあるプログラムを考える

短時間に多くの活動を取り入れると、常に時間に追い立てられ、参加者に無理を強いることになります。結果として、事故やケガにつながることもなります。プログラムの詰め込みにならないよう、活動に取り組む時間にゆとりを持たせるようにしましょう。

③活動の特性を考えてプログラムを組み立てる

動的な活動（体を動かす活動）が続くと体力の消耗が激しくなり、疲労の蓄積が病気やケガの発生の原因になることもあります。動的な活動の後には休憩時間を多く取ったり、比較的、体を動かすことの少ない静的な活動（クラフト・スケッチなど）にするといったように、活動の特性を考慮してバランスよくプログラムを組み合わせることが大切です。

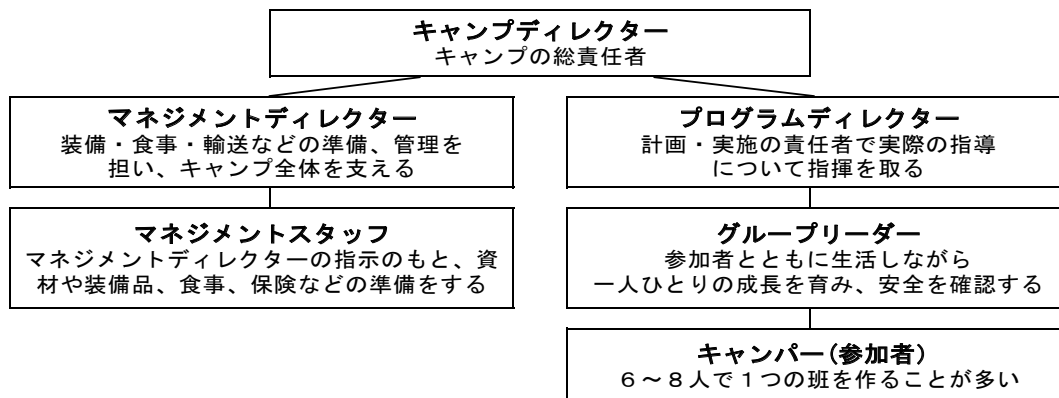


④適切なスタッフ体制を組む

安全にキャンプを行うためには、活動内容に応じて適切な人数のスタッフ確保が必要です。どのような役割が必要なのか、どのような組織にするのかなど、コスト（費用）も考慮しながらバランスよく配置する必要があります。

その場合、キャンプに精通している人（有資格者など）が必ず加わるようにしましょう。参加者とともに生活しながらさまざまな援助を行う役割の人たち（グループリーダー）と、キャンプ全体がスムーズに進行できるように準備運営していく役割の人たち（マネジメントスタッフなど）で組織を作ることが理想的です。

専門的な知識や技術が必要な活動を取り入れる場合には、その活動について十分調べ、トレーニングを受けたスタッフが確保できるか、その活動にはどんな危険があるのか、どのような場合が危険なのか、どんな参加者にどのような危険がともなうかなどを十分検討しておく必要があります。



キャンプにおける組織の一例

⑤悪天候に備えて、代替プログラムを用意する

大雨や強風などの悪天候にもかかわらず晴天時のプログラムを強行したために、事故やケガの発生を招くことがあります。悪天候に備えて代替プログラムを用意しておきましょう。

○実地踏査（下見）

実地踏査は通常、直前から1ヶ月前位のキャンプ本番と同じ時期（季節）に行うことを基本とします。下見では、プログラムが実施可能かどうかを確認するだけでなく、危険箇所や緊急時の避難場所、避難ルートを把握する必要もあります。

事前に出発から帰着までのすべてにわたって、活動ごとに安全対策を立てておき、さまざまな視点で危険と思われる場所を細部にわたってチェックする、常に参加者の動きをイメージしながら危険チェックをするのが現地踏査のコツといえます。

また、その地域特有の自然環境による危険には注意が必要です。地元の関係者等から入念に情報を入手しましょう。さらに、必ず医療機関、消防署、警察署等の連絡先、場所等も確認しておきます。

実地踏査は指導者全員がそろって行うことが理想的ですが、どうしても行くことのできない指導者のために写真やビデオを撮り、後日映像を使って確認できるようにしておきましょう。

○保険の加入

傷害、賠償責任、搜索費用など目的にあった保険に加入し、参加者、指導スタッフ全員を登録します。（P.20 参照）

○参加者に対する事前説明会

事前説明会を必ず実施し、参加者と保護者に参加してもらい、キャンプの主旨、日程、集合・解散場所、緊急連絡先、携行品、諸注意などの実施要項を確認し、情報の共有を行いましょ。また、キャンプ中は不慮の災害や事故、やけど、切り傷などのケガは起こりうることをきちんと伝え、万が一に備えて賠償責任保険や旅行傷害保険などに加入していること、補償はその範囲で行うことを伝えます。

○事故や傷病に備えた役割や処置手順

健康調査票（P.12 参照）、事前説明会等で個人情報を得られたら、その内容に応じて該当する参加者の事故やケガの発生時の処置の方法や手順を決めておきます。この時、個人情報の取り扱いには厳重な注意が必要です。

安全面から見た施設の選び方



キャンプ場の選定にあたっては、さまざまな情報を集めて検討しましょう。インターネットの普及により、最近では施設が提供するホームページの情報を見て施設選びをする人も増えてきましたが、写真などだけで判断せず、実際に下見を行って判断することが大切です。また、「施設案内」などの資料請求が可能な場合はできるだけ多くの資料を集め、細部にわたって確認することが必要です。

施設を選ぶ時に第一に考えることは、実施するキャンプの形態です。たとえば、テント泊なのか宿舍泊なのか、自炊なのか給食なのかといったことがそれにあたります。また、プログラムが決定している場合は、そのプログラムが実施可能かどうかの確認が必要となります。逆に、施設を先に決めてしまう場合は、その施設ではどのようなプログラムが行われているかを施設のスタッフに聞き、プログラム作成の参考にするとよいでしょう。

○テント泊の場合

まず「常設テント」「貸し出し用テント」の有無を確認します。どちらもない場合は、テントを自分たちで用意しなくてはなりません。

キャンプサイトでは、陽当たりや湿気、地面の状態、危険物の有無などを確認します。また、荒天時や落雷時などに待避できるスペースやAEDの有無も確認しておきましょう。

「常設テント」は内部を確認し、荷物のスペースを差し引いて何名が利用できるか、テントマットの有無、テント内部が清潔に保たれているかどうかなどを確認します。

「貸し出し用テント」は実物が確認できれば、生地の状態、清潔さを確認し、「取扱説明書」があれば収容人数や設営方法を確認しておきましょう。同時に、設営時にテントの下に敷く資材（パレットやコンパネなど）やテントマットの貸し出しの有無も確認しておくといよいでしょう。

○宿舍泊の場合

まず、館内の施設とその配置、緊急時の避難経路を確認し、部屋数や生活施設（食堂、浴室、トイレ、洗面所など）がキャンプの規模に適しているかどうかを見ておきましょう。宿泊室では、寝具や部屋の清潔さ、室温・湿度などをチェックします。また、館内に救護室（保健室）、AEDを備えているかどうかも確認しておくといよいでしょう。

施設選びのチェックリスト

- 部屋や寝具は清潔で整理整頓されていますか
- 浴場の広さやトイレの数は適正ですか
- 浴場やトイレは清潔に保たれていますか
- 調理場、食堂、食器類は清潔に保たれていますか
- 水やお茶の補給は可能ですか
- 施設内外の危険箇所は明示されていますか
- 避難口・避難場所は明示されていますか
- 老朽化したところや破損箇所はありませんか
- 施設の地図・設備は明示されていますか
- 関係機関の協力は得られていますか
- 歴史や文化の資源の把握はできましたか
- 地元の人から情報（人的資源も含めて）を収集しましたか
- 漁業権の問題や水辺の営業権は調べましたか
- 携帯電話がつながるか調べましたか

安全面から見た用具の選び方



キャンプの用具は、団体で用意するものと参加者個人で用意するものとに分けられます。団体で用意するものは、さらに本部に備えるものとプログラムで使用するものとに分けられます。

用具を選ぶ際に大切なことは、その用具が使用目的や利用対象に合致しているかを確認することです。たとえば、溺れている人を救助するロープも、川幅に対して短すぎでは救助することができません。ライフジャケットやヘルメットなどもサイズが合っていないければ、本来の役目を果たせません。

また、実施時期にもよりますが、「クーラーボックス」や「発砲スチロール製の箱」で大量の食材を管理することは、食中毒の発生につながる危険があります。

使用する用具が決まったら、取扱説明書などを参考に事前に試してみるものが大切です。過去に使用したことがあるものは、破損がないかを確認し、手入れが必要なものはしっかり整備しましょう。

施設の備品を借用する場合は、手入れが行き届き清潔に保たれているか、サイズがあるものはサイズ別に十分な数がそろっているかなどを確認する必要があります。

安全対策は道具選びから始まっていると考え、入念に行うように心がけましょう。

個人で用意する用具については、購入の前に、すでに持っているもので代用できるものがないか考えるとよいでしょう。学校の林間学校や移動教室などに参加したことがある場合、その時の持ち物は十分に活用できるはずですが、また、靴などは購入したてのものよりも、日ごろから履き慣らしたもののほうがよい場合があります。

装備準備のチェックリスト

- 個人の持ち物が募集要項の中に含まれていましたか
- レンタルの場合、身長、体重、靴のサイズを確認しましたか
- 用具のレンタル先を確保しましたか
- 用具の保守管理状態を確認しましたか
- スタッフの用具は体に合ったもので、保守管理がなされていましたか



安全面から見たプログラムの選び方



良質な活動の機会を提供するためには、企画（プログラム）づくりが重要です。どんな目的で、いつ、どのくらいの期間、どこへ、誰と、何人くらいで、どんな手段で、どんなことをするのか…といったことを明確にしましょう。企画づくりは責任者だけに任せるのではなく、スタッフ（参画者）もかかわることにより、安全確保のために必要なことがらも明確になってきます。

おおよそプログラムが選定できたら、スケジュールリングを行います。この時には、「プログラムの過密性」「時間的な余裕」「参加者の疲労」などを考慮することが大切です。たとえば、登山などの疲労度の高いメインプログラムの直後に野外炊事を行うと、注意力が散漫になり、事故の発生する可能性が高くなります。プログラムの間に十分な休息を取ったり、給食を利用するなどの対応も考えてみましょう。

プログラム企画時のチェックリスト

- 今回のキャンプのねらい（意図・目的）は明確になっていますか
- それぞれのプログラムはキャンプのねらいに沿っていますか
- 参加対象者ははっきりしていますか
- キャンプのねらいにふさわしい場所で実施されますか
- 関連する法規はわかっていますか
- 参加者、スタッフに加入した保険補償内容などの説明をしましたか
- 使用する施設や交通機関などへの申し込みは終わっていますか
- 運営責任者が施設、活動場所を下見していますか
- 企画書はわかりやすく作られていますか
- 収支計画書は作られていますか
- 責任者や担当者が決められていますか
- 担当者の役割は明確になっていますか
- 指導者、スタッフの個性、特技、専門性を十分に生かしていますか
- 装備・準備品一覧表を作成しましたか
- できていないものを、誰に報告すればよいですか（ ）

プログラム実施準備時のチェックリスト

- プログラムの目的・日程をスタッフ全員で確認しましたか
- 地図および現場で活動範囲を確認しましたか
- リスクの多い場所をスタッフ全員が把握しましたか
- 各アクティビティのリスクの大きさをスタッフ全員が把握しましたか
- 参加者についての事前情報をスタッフ全員で共有しましたか
- 天候・気象状況の予報を確認しましたか
- スタッフ間の役割分担を確認しましたか
- 緊急時の行動のシミュレーションを行いましたか
- スタッフの体調・健康状態を確認しましたか
- 用具・装備の最終確認をしましたか

3. 参加者情報の必要性とその扱い方

キャンプ参加者の情報にはさまざまなものがあります。プログラムの充実、緊急時の対応、そして防犯の面からも適切な情報収集と管理が必要になります。

キャンプで収集する個人情報とその流れ

○申込み受付時の情報

- ・参加申込書（参加者の氏名・年齢・連絡先など）
※ キャンプの申込み受付方法によっては省略される場合もある

○事前の情報

- ・基本情報
- ・健康に関する情報（健康調査票）
- ・緊急時に必要な情報
- ・指導のための情報

○キャンプ直前の情報

- ・健康状態の情報（体調チェック票）
- ・お迎えの際の情報

○キャンプ中の情報

- ・健康状態の情報（体調チェック票）
※ キャンプ中の個人記録票に含む場合もある



キャンプで収集する個人情報の内容

○基本情報

参加者の氏名、生年月日、住所、電話番号、保護者の氏名や連絡先などの基本的な情報は、キャンプを実施するために欠かせません。保険の申し込みにも必要です。

顔写真があると本人確認に役立ちますし、電子メールアドレスは個々の連絡だけでなく一斉に連絡を取る場合にも便利です。急な予定変更などを連絡するためにも、情報配信のシステムを構築しておくといでしょう。

○健康に関する情報（健康調査票）

参加者の健康に関する情報を入手しておくことは重要です。既往症やアレルギーを含む持病に関する情報は、「健康調査票」（P.12 参照）などを用いて保護者より提供してもらい、事前に把握しておきましょう。あわせて、ふだん服用している薬がある場合は、薬の名前や使用方法を聞いておきます。

その他、健康医療面の細かなことについては自由記述式で記入してもらいます。できるだけ詳しい情報を収集しておけば、万が一の時に役立つことがあります。特に、持病については、キャンプ中の事故や疾病とのかかわりが深いいため、見落としがないように留意する必要があります。

○緊急時に必要な情報

事故などが起こった時、運悪く保護者に連絡が取れなかった場合を想定した対応も検討しておかなければなりません。参加者を急病やケガで病院に搬送しても、保護者でないスタッフが医療処置を依頼することには制約があります。このような場合に備えて、保護者の意思を確認できる書類、つまり医療に関する同意書を整えておくことも必要です。（P.12 参照）また、持病がある場合には、かかりつけの医師に連絡をして指示を受けることが可能な状態にしておくこと安心です。

○指導のための情報

参加者の性格や対人関係について、特に配慮を要するような場合には、心理状態や生活習慣、友人に関する情報などを自由記述式で記入してもらいます。キャンプ生活に影響を与える人間関係や行動特性などについて記述されることがあり、指導の助けとなるでしょう。

○健康状態の情報（体調チェック票）

キャンプ直前の体調について、以下のような内容を聞いておきましょう。事前にチェック票を渡して、集合時に回収するとよいでしょう。また、同じ内容を毎日チェックします。

<項目例>

風邪をひいている 熱がある 頭が痛い 咳が出る 鼻水が出る のどが痛い
吐き気がする 下痢をしている 便秘がち お腹が痛い 耳が痛い 歯が痛い
目に疾患がある 皮膚炎がある じんましんがある 食欲がない 睡眠不足
生理中である ケガをしている その他（ ）

○お迎えの際の情報

キャンプ解散の時に参加者の迎えに保護者が来られない場合、代理の人が来る場合があります。その場合には、事前に迎えに来る人の氏名を提示してもらいます。解散時には、氏名を確認して参加者を引き渡すことで誘拐等の被害を防ぎます。低年齢の参加者のキャンプでは特に重要です。

情報管理における留意点

○情報の活用とチェック体制

貴重な情報が提供されたとしても、有意義に活用されなければ意味がありません。たとえば、アレルギーに関する情報が保護者から提供されているにもかかわらず、そのことがスタッフに伝わっていないために事故が発生するといったことは避けなくてはなりません。場合によっては、責任問題に発展することもあるでしょう。

複数のスタッフで確認するなど、大事な情報が必ず活用されるようなチェック体制をつくっておくことが重要です。

○個人情報保護

個人の情報は、本来の目的以外には使用しないという原則があります。万一、情報を紛失したり、第三者に漏れたりしたおそれがある場合には、その旨を関係者に伝えなければなりません。些細な情報であっても、参加者に関する情報が学習塾や住宅メーカー等の営業に利用されることもあり得ます。情報の管理は厳重に行わなければなりません。

○健康保険証の管理

健康保険証には本人以外に家族の情報も記載されている場合があります、その取り扱いには個人情報保護の観点から、特に注意が必要です。スタッフであっても必要な時にしか見ることができないよう、封筒に入れて管理し、病院等で必要な時に限って開封するといった配慮も必要です。健康保険証は悪用される危険が高いため、盗難、紛失が起らないような管理に努めなければなりません。

○体格の情報

参加者の身長や体重等は、プログラムの用具を手配する場合や医療機関で薬を出してもらう際には必要な情報です。しかし、個人の身体的な特徴を示すものですので、コンプレックスを持つ参加者もいることに留意し、収集の方法や取り扱いには十分に配慮しましょう。

○個人名が特定されにくい配慮

キャンプやスキーで、名札やゼッケンに名前を書いて活動している光景を見かけます。これは第三者に対して参加者の氏名を示して、個人が特定される状態です。いたずらや犯罪につながる可能性もありますので、むやみに氏名を露出させないような注意が必要です。

また、雑誌等で活動を紹介する場合にも、個人の顔写真についてはできるだけ個人名が特定できないような配慮が必要です。事前に肖像権に関して参加者や保護者に了解を得ておくことも、忘れずやっておきましょう。



〇〇〇キャンプ 健康調査票

保護者記入用

キャンプ中の事故防止および病気やけがに備えてお子さんの健康状況等についてお尋ねします。できるだけ正確にかつ詳細にご記入ください。

なお、この情報についてはキャンプ中の指導および医療関係の対処時に使用するもので他の目的には使用しません。

〇〇〇キャンプ 責任者：△△△△

参加者氏名 ^{フリガナ} _____ (____年 ____月 ____日生) 男・女

〒 _____

住所 _____

写真

保護者氏名 ^{フリガナ} _____ 続柄 (_____)

自宅電話番号： _____

緊急時の連絡先： _____ eメール： _____@_____

既往症 (あてはまるものに○印を付けてください。)

<p style="text-align: center;"><病気等></p> <p>循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、腎臓疾患、貧血、けいれん発作、糖尿病、ぜんそく、過喚起症候群、てんかん、アトピー性皮膚炎、乗物酔い、薬や注射のアレルギー、その他(_____)</p> <p><small>具体的に説明してください</small></p>	<p style="text-align: center;"><食物アレルギー></p> <p>小麦、そば、卵、乳、落花生・アワビ、イカ、イクラ、エビ、オレンジ、カニ、キーウイフルーツ、牛肉、クルミ、サケ、サバ、大豆、鶏肉、バナナ、豚肉、マツタケ、モモ、ヤマイモ、リンゴ、ゼラチン、その他(_____)</p> <p><small>誤って食べてしまったときの症状や処置について説明してください</small></p>
---	---

現在服用している薬 [なし・あり] 薬の名前/使用用法： _____ / _____

キャンプに持参する薬 [なし・あり] 薬の名前/使用用法： _____ / _____

健康面・医療に関する要望

指導に関する要望 (お子さんの心理面や生活習慣等に関してご記入ください。)

下記の文章を読み、ご理解していただいたら署名捺印してください。

私は、私の子どもがキャンプに参加させるにあたり健康面で問題ないと判断しています。万一、子どもがキャンプ参加中にけがや病気になったとき、キャンプのスタッフより緊急に連絡があってもすぐに対応できない場合には、キャンプの責任者に対して、病院や医師を選んだり、入院、注射、麻酔、外科手術など適切な処置について任せることに同意します。また、キャンプ中にキャンプのスタッフが、子どもの身体的な状況や適切な医療処置に関して、子どものかかりつけの医師に問い合わせたりすることを認めます。

かかりつけの医師の氏名 (病院)： _____ (_____ 病院)

医師 (病院) の電話番号： _____ 所在地 _____

_____年 ____月 ____日 両親/保護者氏名： _____ 印



4. 指導者がになう安全管理のポイント

事故はさまざまな要因によって起こります。それらの要因に対してしっかりと準備をすることが、事故予防のポイントとなります。準備すべき項目は多岐にわたりますが、共通点は「危険を予見して回避する」ことです。以下に示す内容を参考に、必要な準備を洗い出しましょう。

また、参加者自身が活動中の危険性について認識を持ち、自ら準備することができれば事故は確実に減っていきます。ですから指導者は、参加者に「何が危険でどうしたら防ぐことができるのか」を気づかせ、「自分の安全は自分で守る」意識を育てる役割（責任）もあります。

指導者のプログラム安全チェックリスト

この表は指導者が事業やプログラムを実施する時に求められる注意義務を中心に作成した安全チェックリストです。

	人的側面	物的側面	場所的側面
計画準備段階	参加者のニーズと能力を考えた計画か？ 参加者の技術能力を正しく把握する義務 参加者の健康調査 参加者の体力・経験度を考えた計画か？ 参加者の体力・健康状態を正しく把握する義務 事前説明会の実施 指導スタッフの組織体制づくり 医師やナースの配置 安全教育の実施（事前指導）	必要な物品のリストアップ ・プログラムのために ・安全確保のために ・緊急時のために 道具、物品のチェック 救急薬品、救急物品の準備 万全の準備をする義務 周到な準備義務	安全な場所の選定（情報収集） ・第一予定地を決める ・第二予定地を決める 安全な場所を選ぶ義務 現地の下見・調査をする ・緊急時の非難、連絡方法の確認 事前の下見・調査をする義務 関係機関・関係団体への連絡をする
	* 予測される緊急事態の想定 → 対処方法の検討 → 保険加入 * 予測される事故の想定 緊急時のマニュアル作成 → 危険を予測し、救助体制を整えておく義務		
実施段階	実施前の諸注意をする 事前に注意事項を徹底させる義務 実施中の健康管理・健康チェック 休憩・休養はとっているか？ 適切な指導をしているか？ 指導者の数・指導者の能力 適切な指導方法で指導、監督する義務 常時監視をしているか？ 常時監視、人員確認義務	危険なものを排除する 物品の整理整頓をしておく 必要に応じて物品の補充、追加をする 危険防止のための処置をとる義務	実施前にその場所の安全確認をする その場の安全を確認する義務 その場所の環境整備をする その場所の衛生管理をする 状況の変化に応じて場所を代える 臨機応変の処置をとる義務
	* 状況の変化に応じて、プログラムを変更する → 中止する 危険な状態を発見し、危険を防止する義務 * 救助、救急体制を整えておく 万一の事態に備え、救急体制を整えておく義務		

ふだんから安全について学ぶ



安全に、事故のないキャンプを運営するためには、安全管理に関する「知識」と「技術」を身につける研修が必要です。「知識」とは、危険の種類、危険を回避する方法、事故発生時の対応などに関するもので、「技術」とは、主に事故発生時の対応に関するものです。

安全管理の知識を身につける研修

事故を未然に防ぐための一番の準備は、「危険を知る」ことです。できるだけ多くの危険を知り、さまざまな角度から対応策を練っておくようにしましょう。

○KYTトレーニング（危険予知トレーニング）

KYTとは、「危険」「予知」「トレーニング」の頭文字を取った略称です。危険を予知し、回避する能力を、イラストを使ってゲーム感覚でトレーニングできるものです。社団法人全国子ども会連合会が、子ども会活動中のケガを防ぐために作成したものです。

【問合せ先：社団法人全国子ども会連合会】



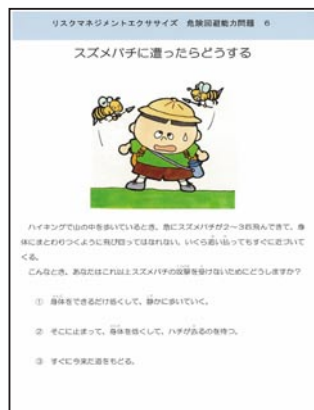
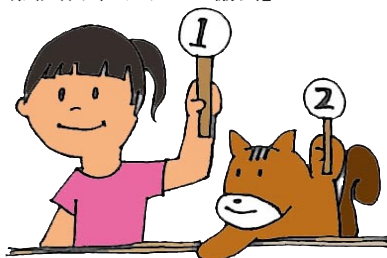
子ども会KYTシート「野外炊事」

○リスクマネジメントエクササイズ（RME）

野外活動における「事故防止対策」「事故発生時の対応」「危険回避」の3点について、知識や方法を学ぶものです。用意された問題をグループで話し合いながら解いていくことによって、個人では気づかなかった対策や対応の知識を共有することができます。

※リスクマネジメントエクササイズはリスクマネジメントセミナーで体験でき、体験された方のみ冊子を入手出来ます。

【問合せ先：社団法人日本キャンプ協会】



リスクマネジメントエクササイズ
「スズメバチに遭ったらどうする」

安全講習を開催している主な団体・組織



万が一事故が起きてしまった時のために、指導者やスタッフは、救急処置のトレーニングをしておく必要があります。救急法、止血法、心肺蘇生法などの講習会に定期的に参加するように努めましょう。また、使用施設の防災訓練などへも積極的に参加するようにしましょう。

○日本赤十字

日常生活における事故防止、手当ての基本、人工呼吸や心臓マッサージの方法、A E D（自動対外式除細動器）を用いた除細動、止血の仕方、包帯の使い方、骨折などの場合の固定・搬送、災害時の心得などについての知識と技術を習得できます。

・基礎講習

受講資格：満 15 歳以上の者

講習内容：傷病者の観察の仕方および一次救命処置（心肺蘇生法、A E Dを用いた除細動、気道異物除去）等救急法の基礎

○東京都消防庁

心肺蘇生（A E Dを含む）、ケガの手当ての方法を習得してもらうため、都民や事業所等を対象として応急手当の講習会を行っています。

・応急救護講習（ケガの手当て）を受講する場合 ⇒ 都内各消防署

・普通救命講習（A E Dを含む心肺蘇生）を個人または数人で受講する場合

⇒ 都内各消防署または（財）東京救急協会


○メディックファーストエイド社

効率よく救急法と蘇生法を同時習得する画期的な応急救護講習プログラムを行っています。講習は、インストラクターが各自で料金を設定し、日程を組んで提供していますので、講習のスケジュール、場所、費用等については、直接、トレーニングセンターまたはインストラクターにお問い合わせください。

心の安全管理

安全管理で意外と忘れがちなのが、「心の安全管理」です。参加者やスタッフが、違和感や不安を抱えていたり、グループ内で仲たがいが起きていたりすると、事故が起きる可能性が高まります。このような「心のリスク」を少しでも回避しておくことで、安全管理の知識と技術を最大限に発揮することができます。事前の研修において、最低限以下の4点を確認しておくといでしょう。

- ・スタッフはプライベートな悩みをキャンプに持ち込まない
- ・責任者は、スタッフの性格、技量を把握しておくこと
- ・スタッフ同士のコミュニケーションが取れていること
- ・参加者の心の状況を顔色や言動から推し量ること



5. 事故が起きてしまったら

十分な備えをしていますが、事故は突然起こります。その時、指導者には冷静な判断と対応が求められます。事故が起きた時に慌てないためにも、事前に事故対応のシミュレーションを行い、対応方法を確認しておきましょう。また、事故が起きたことを想定して日頃から事故対応のトレーニングを定期的に行うことが大切です。

事故が起きた時の基本的対応

①冷静になる

心の準備ができていない時に事故が身近で起こると、人は適正な判断力を失うことがあります。適正な判断ができないと、場合によっては被害を拡大してしまうことがあるので、まずは冷静になることが大切です。

②自分自身の安全を確保する（二次災害の防止）

救援や応急処置を行う時、自分自身の安全確保を忘れないようにします。水難事故に遭遇し、救助しようとしてあわてて飛びこみ、自分も事故にまき込まれるといったケースがよくあります。二次災害を起こすことのないよう、十分に注意が必要です。

③被害者以外の人たちの安全を確保する（二次災害の防止）

現場では、どうしても被害者に目を奪われてしまいます。まずは、それ以外の人たちの安全を確保した上で、対処に向かう必要があります。人数の確認を忘れず行いましょう。

④被害者の救護を行う

救急車等の手配を行うと同時に、必要な応急処置を行います。

119番通報は、落ち着いて負傷者の位置と状況、負傷した理由等をわかる範囲ではっきりと知らせます。

⑤警察への連絡（重大事故の場合）

重大事故の場合、110番通報を行います。

⑥事故の記録を取る

わかる範囲で、記録を残しておきます。必要に応じて、写真も撮っておきましょう。被害者やその家族への報告や保険請求などに役立ちます。

ケガ人の氏名など 事故発生の日時・場所 処置の内容 事故の状況と程度 など

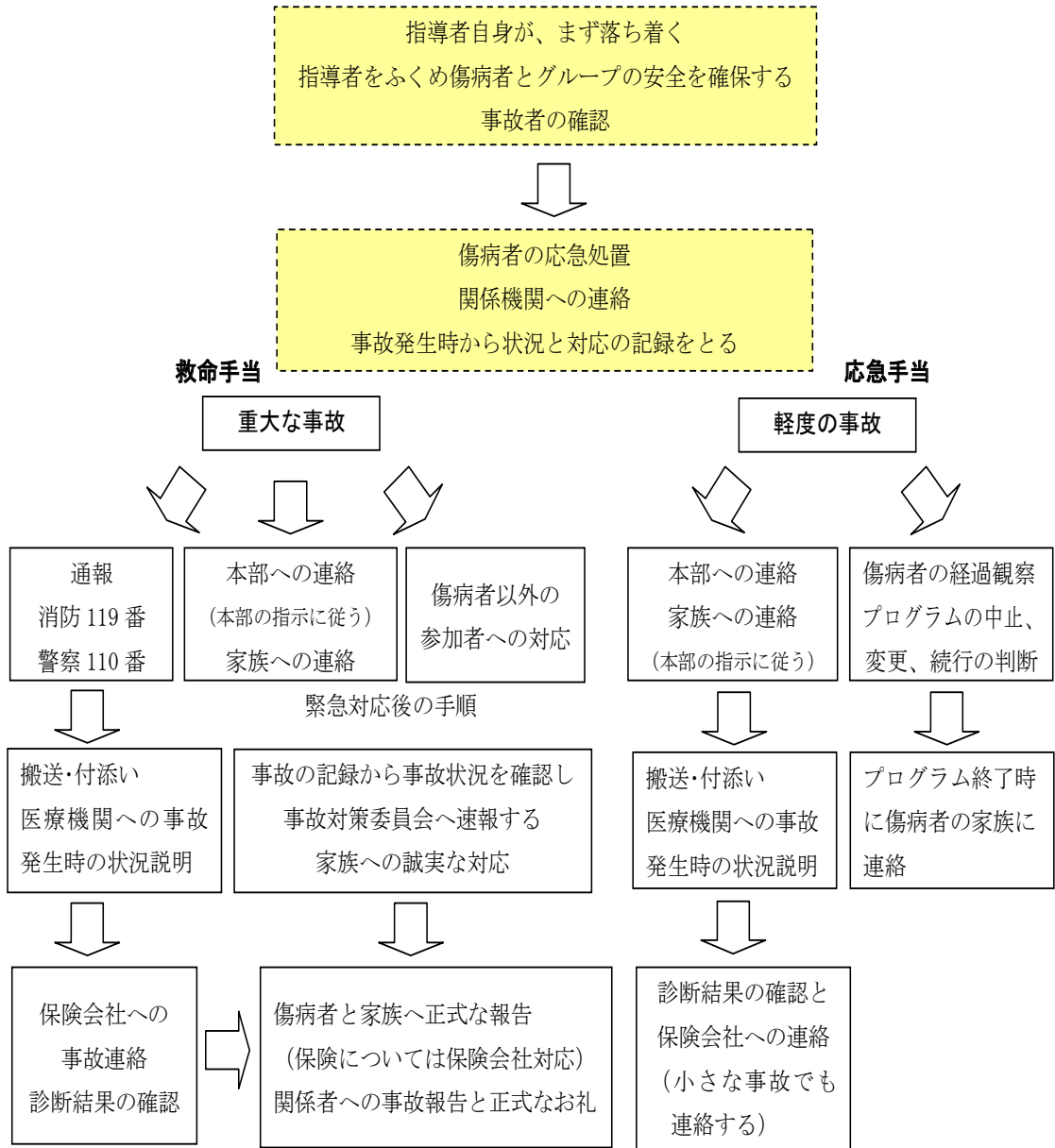
⑦保険会社へ連絡

⑧負傷者への誠意を持った対応

負傷者へのお見舞い、お詫びなど

※保護者（身内）への連絡は、報告連絡事項が整ってから行いましょう

事故発生



119 番のかけ方

救急車をお願いします。

事故発生場所 ○○市○○町営○○キャンプ場です。管理棟の北側約30メートル先です。(目印になるもののみつけて伝えます)

事故発生時間 ○○時○○分(5分ほど前)に事故が発生しました。

傷病者の名前・年齢・性別 ○○○○さん8才の男の子です。

傷病者の容態 スズメバチに刺され、首と顔の2箇所が腫れ、呼吸困難と顔面蒼白な状態です。

救急隊員の到着までの時間と応急処置の方法を確認します。

通報者の名前・電話番号 ○○○○です。電話番号はすぐ言えるようにしておきましょう。

応急処置（応急手当と救命手当）



応急処置には、軽微な病気やケガに用いる応急手当と命にかかわる状態の時に用いる救命手当があります。指導者だけでなく参加者も応急手当を知っていると、事故やケガが発生した時の被害を最小限にとどめることができますし、ケガや病気の予防につながります。「自分の安全は自分で守る」の原則に立ち、救急法習得のための講習会等を積極的に受講するようにしましょう。

応急手当

○病気の場合

キャンプ中に病人が出た時は患者の訴えをよく聴き、体温、脈の計測と呼吸、顔色などの病態を観察します。次に、事前に作成しておいた「健康記録カード」に訴えの内容、計測結果、症状等を記録します。同時にキャンプ前に参加者から提出された「健康調査票」から病歴や平常時の体温、脈を確認します。

これらの情報に応じて、患者を安静な状態にし、保温や冷却などの処置をします。指導者は医療従事者ではありませんから、決して安易な判断で市販の薬などを飲ませないようにしましょう。また、以下のような場合は、危険な状態に陥る可能性がありますから、救命手当を行い、直ちに医療機関へ搬送してください。

- ① 呼吸器系の障害
- ② 激しい胸痛
- ③ 激しい腹痛
- ④ 激しい頭痛
- ⑤ 頭部外傷や意識不明

○R I C E 処置

① R e s t (安静)

痛みや腫れを抑えるために患部だけではなく、全身を動かさないようにします。

② I c e (冷却)

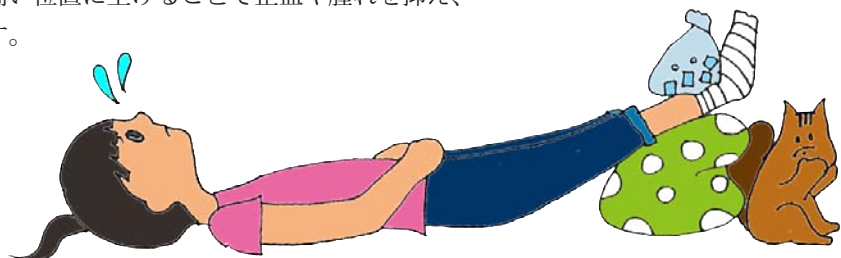
冷やすことで出血や腫れを抑えます。また痛みを和らげます。

③ C o m p r e s s i o n (圧迫)

患部を包帯等で圧迫すると出血や腫れを抑えます。固定の効果も痛みを抑えます。

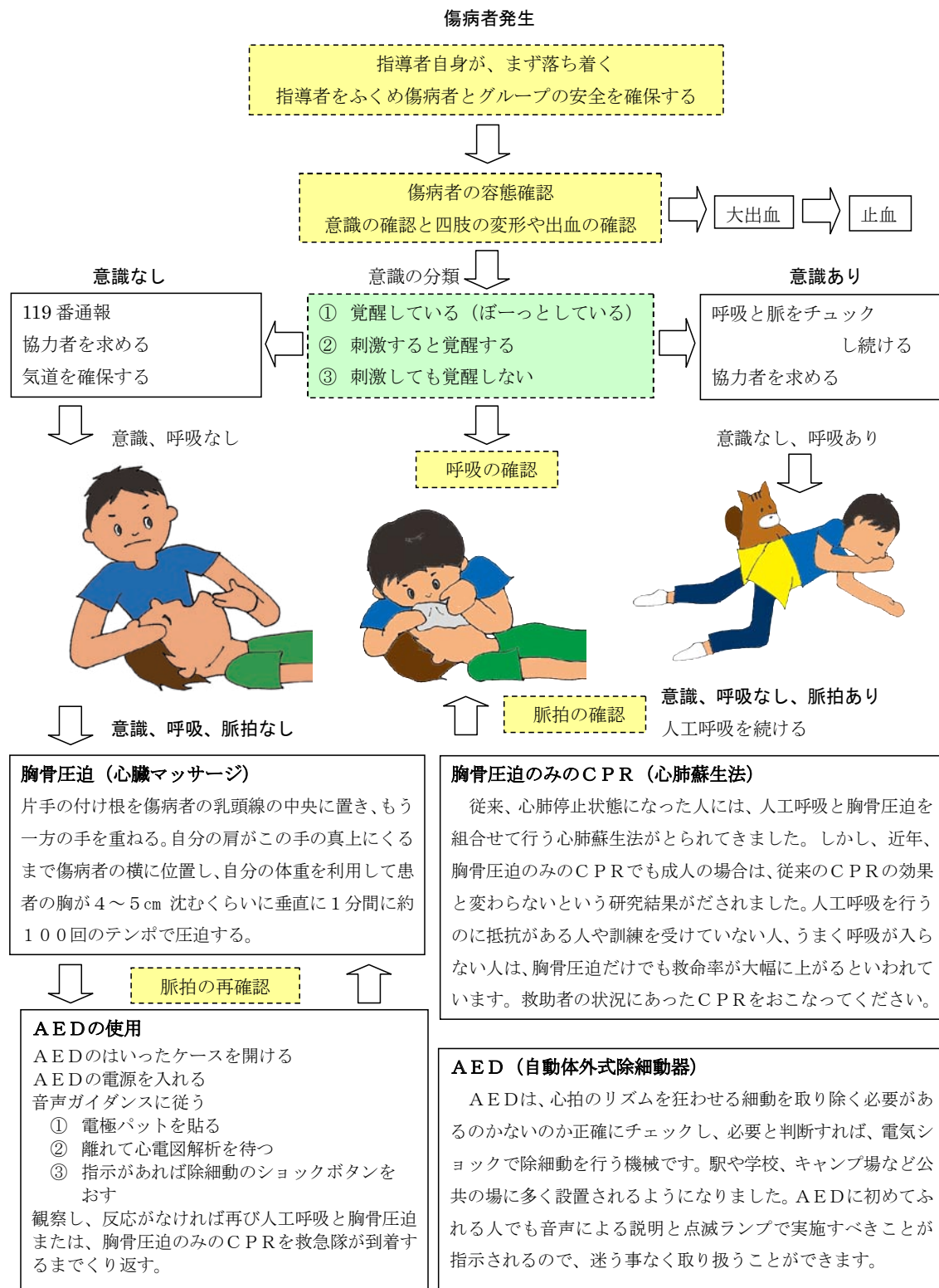
④ E l e v a t i o n (拳上)

患部を心臓より高い位置に上げることで止血や腫れを抑え、痛みを和らげます。



救命手当

意識障害、呼吸困難、心停止、大出血、重度のやけど、中毒が見られたら直ちに救命手当を行います。



6. 保険は重要なリスクマネジメント

保険の加入は最低限のリスクマネジメントといえます。キャンプを主催する場合には、必ず、賠償責任保険に加入するようにしましょう。また、参加者には傷害保険に加入してもらうよう促す必要があります。

○賠償保険

賠償保険では、被保険者（補償を受ける者、ここでは主催者および指導者）が、(A) 偶発の事故により、(B) 他人に損害を与えた場合、(C) 法律上の賠償責任を負担することによって、(D) 被る損害を補償します。(A)～(D)のどの一つが欠けてもこの保険の対象とはなりません。

この保険で対象とする被保険者が法律上負担する賠償責任とは、以下の2つです。

- ①対人賠償：他人をケガさせたり、死亡させたりした場合。
- ②対物賠償：他人の物を壊した場合。

野外活動において考えられる具体的な「賠償責任」は、次の3つが考えられます。

- ①指導中における賠償責任（指導ミス、管理の不備、監督不行き届き、設営等のミス）
- ②飲食物による賠償責任（飲食物等が原因で食中毒の事故）
- ③貴重品等、一時的に預かりその損害に対する賠償

「賠償保険」では、次のような項目で支払われます。

①損害賠償金

被保険者が被害者に対して賠償債務のために支払うことを義務づけられた金額。治療費、入院費、通院費、慰謝料、休業損、葬儀料、死亡による逸失利益や物の修理代等の費用。

②訴訟費用

保険会社の承認を得て支出した訴訟、仲裁、和解または調停のための費用、訴訟の結果被保険者側の勝訴に終わっても補償されます。

③損害防止軽減費用

この費用のうち、応急手当・護送・その他の緊急措置に要した費用については、被保険者に賠償責任がないことが後で判明された場合でも補償されます。

○傷害保険

傷害保険とは、「傷害」つまり「ケガ」をすれば保険金の支払い対象になります。ただし、保険金が支払われるには、「急激」かつ「偶然」な「外来」の事故によって身体に傷害を被り、その直接の結果として死亡したり、入院・通院した場合等という条件が満たされる必要があります。

「急激性」

単に時間的に短いということだけでなく、「予測不能」と「不可避」の2要素が必要です。

例1：「屋根瓦の修理中に足を踏み外し転落する事故」について考えると、「屋根瓦の修理中に足を踏み外す」ことは予測不能ですし、「転落」する過程は不可避です。

例2：「有毒ガスを継続的に、吸引、呼吸または摂取した結果生じる中毒症状」は「有毒ガスを継続的に、吸引、呼吸または摂取する」ことが急激にあたらず事故とはいえません。

「偶然性」

原因または結果の一方または、両方が「偶然」であることが必要です。

例 1：偶然が原因（階段で足を踏み外すなど）

例 2：結果が偶然（荷物を持ち上げて腰を痛めるなど）

例 3：原因と結果がともに偶然（道路で転んだところを走ってきた車に轢かれるなど）

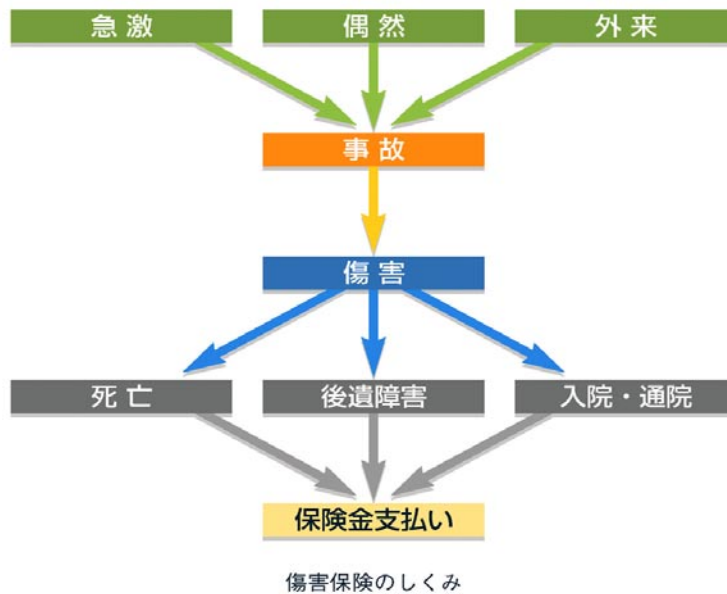
足の骨折治療中にボールを蹴って悪化させた場合等、十分に結果を予想することができたケガは対象になりません。

「外来性」

外来性とは、傷害が身体の内部からでたものでないことを明らかにする主旨の要件です。

例 1：脳疾患、心臓疾患、糖尿病性昏睡等により意識不明により転倒、あるいは自動車運転中運転不能になり事故にあった場合等は、事故の原因が身体内部にあるため外来性の要件からはずれません。

例 2：犬にかまれて狂犬病にかかった場合や、海に転落し救助に時間がかかり肺炎になった場合等は、急激、偶然、外来の事故を直接の原因としているため傷害事故となります。



・傷害保険における傷害

傷害とは、一般的には「ケガ」ですが、傷害保険においてはさらに範囲が広く、身体外部から発生した原因による身体の損傷を含みます。従って、打撲傷、切り傷、刺し傷、やけど、捻挫、骨折に限らず、内臓破裂、筋違いや窒息（煙による窒息、溺死、食物が喉に詰まったための窒息死等）、毒物による急性中毒等も対象になります。

○利用できる保険の例

・ボランティア保険

ボランティア活動に参加する個人や団体を対象に、傷害保険と賠償保険をセットにしたものです。全国社会福祉協議会が一括して保険会社と締結するもので、保険料は非常に安く設定されています。

【問合せ先：市区町村の社会福祉協議会】

・スポーツ安全保険

スポーツ活動、文化活動、ボランティア活動、地域活動などを行う5名以上のアマチュアの社会教育関係団体（営利団体は対象外）を対象としています。例えば、少年野球チームや、子ども会などが加入しています。傷害保険と賠償保険が含まれています。

【問合せ先：市区町村にあるスポーツ安全協会支部】

・レクリエーション保険

参加者の活動中のケガに対する傷害保険です。特約により賠償保険をつけることも可能です。名称はさまざまですが、損害保険会社各社で取り扱っています。対象の条件として、1日の参加者数の下限（1日20人以上など）を設けています。

【問合せ先：損害保険会社各社】

傷害保険

日本キャンプ協会では、会員が実施するキャンプのために、補償が大きく割安な傷害保険をご用意しています。期間やプログラム内容に応じてお選びください。

キャンプ保険（国内旅行傷害保険）

掛 金：1泊2日以内367円/人～（期間によって異なります）
補償内容：死亡・後遺障害 1,000万円
入院・通院 4,000円/日
賠償責任限度額 1億円（免責0円）など

デイプログラム保険（レクリエーション保険）

掛 金：50円/人～（プログラム内容によって異なります）
補償内容：死亡・後遺障害 1,000万円
入 院 ……………4,000円/日
通 院 ……………3,000円/日など

詳しくはパンフレットをご覧ください。
日本キャンプ協会ホームページ「ダウンロードセンター・
会員向け情報」でPDF版をご覧ください。

www.camping.or.jp/download

あなたのキャンプを サポートする保険

賠償責任保険

指導者賠償責任保険に指導者会員全員が加入しています。

補償限度額：対 人 ……………5,000万円/人（1事故3億円）
対 物 ……………1事故1,000万円

※ 指導者賠償責任保険は、指導上の賠償責任を問われた場合に、その損害を補償するものです。キャンプ中のケガによる通院費などを補償するものではありません。キャンプ実施にあたっては、必ず「キャンプ保険」などの傷害保険をかけてください。

いずれの保険も利用できる
のは、日本キャンプ協会会員
のみです。更新は忘れず行い
ましょう。



資料：チェックリストで事故を未然に防ごう

①段階別チェックリスト（企画計画段階）【例】

キャンプ全般に関するチェック項目（8項目）

- キャンプのねらいや目的が明確になっていますか
- キャンプの主催者や実施の責任者、指導体制が明確になっていますか
- 会場は、キャンプの目的に合う安全な場所を選んでありますか
- 参加者の対象が適切に設定されていますか
- 開催時期、日程はキャンプのねらいや目的に合っていますか
- プログラムは過密になっていませんか
- 悪天候や気象の変化に対応できるプログラムは用意されていますか
- 事故防止、救護体制等の安全対策計画が作成され、責任者の承認を受けていますか

実地踏査（下見）に関するチェック項目（8項目）

- 実地踏査は目的をもって計画的に行われていますか
- 活動時の状況を正確に把握できる時期や時間に実施していますか
- 活動場所の実地踏査は十分に行いましたか
- キャンプに携わるスタッフが同行していますか
- 参加者の視点にも立って、安全を確認していますか
- 実地踏査の結果報告はできていますか
- 現地の人や施設職員から危険な場所等の情報を入手しましたか
- 実地踏査の結果は資料としてまとめられ、実施計画や安全対策に反映されていますか

指導体制、役割分担に関するチェック項目（8項目）

- スタッフの人数や経験は、活動の内容に対して十分ですか
- スタッフの中に、安全や救急に関する技能や知識を持った人はいますか
- スタッフの役割分担は明確になっていますか
- スタッフ間のコミュニケーションは図れていますか
- スタッフに対する事前の研修やスタッフ間の打合せはできていますか
- スタッフは、下見や計画の策定に参加していますか
- 外部からのボランティアや未成年のスタッフに対して、その任務や責任範囲が明確になっていますか
- スタッフの中に、安全（健康）担当者を置いていますか、またその役務は明確になっていますか

②プログラム別チェックリスト（キャンプファイアー）【例】

チェック	確認事項	内 容	
実施前	1	天候の確認	降水確率を確認したか 警報・注意報などが発令されていないか
	2	場所の確認	周囲に引火するものはないか 参加者の人数に適した広さが確保できるか 風の影響を受けやすいか
	3	ファイアー場までの道のりの安全確認	参加者が安全に移動できるような道を確保しているか ケガの要因になるような物の除去を行ったか
	4	避難場所・経路の確認	雨天時・緊急時に参加者を安全に誘導できるか 避難場所・経路を確認したか
	5	備品の確認	水の入った消火用バケツ、スコップ、火バサミ、薪、灯油、なたの準備をしたか
	6	指導者の持ち物確認	水筒は持ったか 救急セットは用意してあるか 懐中電灯は持ったか 雨具は用意したか
	7	注意すべきことの確認	火に近づかない、ふざけないなど、参加者に必要な諸注意を徹底したか
	8	進行の確認	プログラム内容や時間設定に無理がないか
	9	服装の確認	参加者：綿素材の長袖・長ズボンを着用しているか ファイアーキーパー：綿素材の長袖・長ズボンに軍手・革手袋を着用しているか
	10	体調の確認	トイレは大丈夫か 水分補給はしているか 顔色は悪くないか
実施中	1	参加者の安全確認	火に近づいていないか ふざけていないか
	2	体調の確認	疲れやのどの渇きをうったえていないか トイレは大丈夫か 顔色は悪くないか
	3	火の管理	火が大きくなりすぎていないか 周囲に引火するものはないか
	4	消火バケツの場所の確認	緊急時にすぐ消火できるように置いている場所を把握しているか
	5	避難場所・経路の確認	懐中電灯をすぐ取り出して、参加者を避難場所まで誘導できるか
	6	プログラム進行状況確認	円の大きさは適当か 参加者が立ちっぱなしになっていないか
	7	人数の確認	参加者は全員いるか
実施後	1	人数の確認	参加者は全員いるか
	2	体調の確認	トイレは大丈夫か 疲れやのどの渇きをうったえていないか 顔色は悪くないか
	3	テントサイトまでの道のりの安全確認	懐中電灯で足下を照らし、参加者を安全に誘導できたか
	4	後片付けの確認	火を完全に消火したか 灰の処理はできたか 借りた備品を返却したか
	5	忘れ物の確認	忘れ物はないか

③キャンプ全体の安全チェックリスト【例】

平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 記入者 (_____)

NO	項 目	チェック欄
1	用具や器具の安全点検は行いましたか？	
2	会場周辺に警報・不審者情報は出ていませんか？	
3	応急手当用品（救急箱）は準備できていますか？	
4	活動中に特に留意する点について十分に準備できていますか？	
5	参加者およびスタッフの保険加入はできていますか？	
6	活動場所や施設内で、参加者がケガをしそうな場所はありませんか？	
7	活動中の安全管理についてスタッフ間での共通理解はできていますか？	
8	健康面で配慮を要する子どもの把握・対応はできていますか？	
9	活動前に、参加者に対する安全管理面での指導をしましたか？	
10	キャンプ中、参加者の様子に異変はありませんでしたか？	
11	キャンプ終了後、参加者との間で問題はありましたか？	
状況・気づいた点	病気・ケガの状況 ヒヤリとした状況 その他 (○で囲む)	
	具体的内容	

資料：事前にチェック、お役立ち情報！！

○気象情報

気象情報はテレビやインターネット、携帯、などさまざまな手段で確認することができます。当日の気象情報はもちろんのこと、週間の予報も合わせて確認しておきましょう。また、夏に多く上陸する台風情報も要チェックです。

【収集先】 日本気象協会、国土交通省気象庁、ウェザーニュース、東京電力 - 雨量・雷観測情報 -

○山の情報

インターネットでは刻一刻変化する山の情報をリアルタイムで知ることができます。

【収集先】 山と溪谷社 - 山岳情報 -、各都道府県山岳連盟・協会、その他各都道府県警察本部

○海の情報

海上保安庁では海水の温度や潮の流れ、日の出・日の入りなどの情報も得られます。

【収集先】 海上保安庁マリレジャー

○河川の情報

雨量の確認やダム放水情報なども得られます。

【収集先】 国土交通省 - 川の防災情報 -

安全に関する情報を得ると共に、それぞれのフィールドでのマナー等も確認しておきましょう。

○病院等の情報

万が一に備えて、現地の病院の連絡先や住所、行くまでの道順なども事前の情報として収集しておきましょう。活動日が祝休日の場合は、休日診療を行っている病院を確認しておきましょう。

【収集先】 W A M N E T - 病院・診療所検索 -、Y a h o oヘルスケア - 病院検索・歯科・歯医者検索

○交通情報

渋滞情報はもちろん、工事中で通れない道路がある可能性もあります。

【収集先】 日本道路交通情報センター、国土交通省道路局：渋滞情報

○地理情報

現地を散策するようなプログラムがあれば、事前に地図を用意しておくことも大切です。

【収集先】 国土地理院 - 地図閲覧サービス -

○緊急通報用電話番号

110（警察）事故、事件

118（海上保安庁）海上の事故、事件

119（消防、救急）ケガ、急病

171（災害用伝言ダイヤル）

ここに載せた情報だけでなく、活動に合わせて必要な情報を収集することを心がけましょう。



NCAJ

National Camping Association of Japan

キャンプを企画する人のためのリスクマネジメントのてびき
安全なキャンプのためにPART 10

2009年7月19日発行

発行者	野澤 巖
編集	社団法人日本キャンプ協会 安全管理委員会 高見 彰 畠中 彬 大橋光雄 粥川道子 佐藤初雄 長井せつ子 水沢利栄 吉田大郎 吉野宏美
イラスト	黒江美穂
発行所	社団法人日本キャンプ協会 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年総合センター内 TEL : 03-3469-0217 FAX : 03-3469-0504 E-mail : ncaj@camping.or.jp http://www.camping.or.jp
印刷	有限会社サンエイプレス

☆ 2009年度安全なキャンプのための標語☆

「キャンプ中 変わる気象に 変わらぬ注意」(一般の部・最優秀作品)

「パパ見てて 私の笑顔と 空模様」(少年少女の部・最優秀作品)

Copyright (社) 日本キャンプ協会 無断転載を禁ず